我に返つたとは云ふものの未だ頭ははつきりとしない。僕はその明瞭に意識せぬ間にフラ〳〵と體を運んだ。眼はなんだかボッとして自分で自分の足を運ぶのがわからない。併し跫音だけは澄んで耳によくひゞく。急に風が出たと思つたら、何時の間にか叢の中へ這入つて居た。立止つて見た。矢張り體がフラ〳〵する、後向に今來た道を見返つた。暗くて何も見えない、行手を見たがやつぱり同じだ。

十間ばかり向ふに火の玉か知らんフラ〳〵する、ギョッとしてヂッと動くのを見てると火の玉はだん〳〵近寄る、どうして呉れやうと思つてると、提灯を持つた人がヒョッコリ眼前に現はれた。何だ馬鹿〳〵しいと思ひ返つて又歩き出した。

火の玉のお蔭でいくらか意識が明瞭になつて來た、すると早く家へ歸りたい、靜かに讀書を樂しみたいなどの慾望が湧いて來てどこでも道と思ふ所を無暗に突進した。

しばらくして又何か物の怪に襲はれた樣な氣がしてゾッとした。行手に人が居るんだ。耳を澄ますと跫音がするやうではあるが此方へ來るか向ふへ行くのかわからない。僕は踞んだ。そして向ふの頭と思ふ邊を空に透して見た。僅か黑ずんで、阿彌陀に冠つた中折帽を見分る事が出來た。だがどつちへ行くのか未だわからん。其の中にわかるだらうと氣を長く待つてると歩き出した、歩き出した、ヤッおかしいぞどつち行くんだらう。薩張りわからん、ウン腰付がおかしいぞ、ア、わかつた、わかつたどうも醉つてるらしい、そう思ふと何だか鼻唄でもやつてるやうだ、フン〳〵云つてる。厭な氣持ちだ。何となく薄氣味が惡い、さつさと行けばよいのにと思ふが先生悠々としてなか〳〵捗取らん。仕方がないからそろ〳〵と成べくおそく跡をついて行く。實際歩きにくい事おびただしい。向ふでは面白半分態とゆつくり行くんぢやないかと思はれる。

再び踞んで見た。もう一度透して見た。もつと委しい觀察がしたいからだ。だがやはり傾いた帽子より何もわからない。僕はつくづく閉口した。道の長さと夜の暗さとに實際うんざりした。

思ひ切つて通り拔けようと決心した跫音も憚らずぐん〳〵行つた向ふで氣付いたか振返つた樣だ。すれ違ひ樣に、ぐいと顏を突出されたので一寸驚いた。僕は肩を聳かして平然と通り越してやつた。やれ〳〵と重荷を下した氣になつたが後から寛々として迫らぬ跫音を聞いては追立てられる樣に氣が焦つた。充分に力を入れて努めて平氣にドカドカ進んだ。そして咳拂ひ一つしてやつた。だか矢張り心には後の醉漢が跟いて來る。

湖上遠漕記

三丙　大久保明文

時は大正六年吾彥中第二選手は八月四日武德會參加の爲、一學期を犧牲にして琵琶湖上に猛練習を重ね、七月二十八日より琵琶湖を一週して大津なる石場に行かむと欲し、同日朝三時選手はユニホームに後鉢卷の勇敢なる体にて彥中艇庫を解纜し、大濤を破り裂きて長濱にと志しぬ。

此宵は十三夜の月隈なく澄み渡り、航艇は湖面に映ずる月陰と、トップの燈の光とを碎く夜中金波銀波の間を漕ぎ行く面白さは吾人一生に再び會す可からざる也。吾人ら選手が長濱附近の古戰場にて有名なる姉川に上陸せしは六時頃なり。太陽已に東山に出でゝ吾等の遠漕を迎へたり。此れより東淺井郡な

る友人某の家を訪問して後親切なる某寺にて朝食をなし、ボートに乘り出でしに又も古戰場にて有名なる賤岳を見、右には遙かに多景島を望み竹生島〳〵へと向ひ長き航路を漕ぎ盡して十一時に到着せり。此時已に吾等選手は大いに疲勞を來したり。上陸して辨財天に參拜し多くの寶物を通覽したり。本年は辨財天開張のため盛に建築をなし居れり。吾等漕士は疲勞回復のため枕を並べ、風光絶佳なる觀月殿にて午睡をなし居りしが、波稍激しくなりしため急ぎて同島を發し、海津へとオールを取る。此竹島のあたりは琵琶湖々中最深の所なるを以て水黑く見ゆるのみならず、湖上稀なる大濤はボートを覆さんとする如き有樣なりき、されば恐怖心も大に起り、一時間餘のベストのロングにて漕ぎて海津にと近づく。此邊に於けるボートのスピーチ及進行の速き事未だ嘗て練習中に見ざるところなり。湖上には多くの鷗の或は空を飛ひ或は波に遊ぶを見たり。間もなく海津の港につきたり時に三時前なり。一の旅宿にて食事をなしたり。本日は此海津にて宿泊する豫定なりしかど、時未だ早かりしを以て三十分の休憩を爲して波止場に行きぬ。ボート及び水と部旗は吾等を待ち居れるが如し。又乘りて今津へと向ひぬ。漕ぎ行く艇の右は雲か山か點々として水天の間に見ゆるのみ。太陽は稍西山に傾き、其酷熱は吾人等漕士をして大いに苦しましめぬ。風和ぎ波止み太陽沒して後今津に着きにけり。時に七時。此間少しの興味も無く皆疲れ果てゝ唯々漕行くのみなりき。今津の町に着きし頃は多くの人々、棧橋に湖邊に出でゝ吾等選手に歡迎の意を表したり。吾等は棧橋と湖面に面したる宿に泊り湖中にて汗を流し、ボートを吾等の泊り居る宿の前に着け後食事をなせり。食事後三十分の自由行動の時間ありし爲、或者は今津の街衢をランニングする者もあり、又郷里に手紙を出す者などありて、三十分の自由行動時間に於ても有益に時間を費せり。半時の後各人宿に返り、暫時の休憩の後バック臺の練習をなし、明朝三時出發に後れざる樣旅宿の主人に命じて床に入りたり。時に團々たる明月は蚊帳を透して湖東の山頂に現れ出で、月陰湖面に寫りて風景甚だ好し。座敷の蚊帳に入りてより吾等選手が互に今日の遠漕を語り合ふ中に漕勞のため何時しか夢路を辿れり。

翌朝二時頃下女は吾等を起せしため都て起上り食事を濟し、辨當を携帶して三時宿を出づ。湖邊には夜廻人の音のみして宿の者は湖邊に送り出でたり。これより吾等はトップに燈を點じ、リーダーに水上部旗を立て、大いに勇を鼓して長き湖邊を漕ぎ、左には廣袤千里天地一線をなす宏大なる饗庭野の原野を見るいつしか北船木、南船木の港沖を過ぎ上陸豫定の大溝沖をも通過せり。航程長く漕ぎ行く儘に夜は明け果てゝ暑さ又甚し。彼處此處多くの岬の如きものゝ沖を通り越へ白鬚神社に着きぬ。先づ參拜し後晝餐をとる。時に十一時。之より木蔭涼しき湖邊の松が根に假寢の夢を結び、一時上陸して近江舞子と稱する小濱に向ひたり。向駒は頭上に威を逞しくし、且無風なる故漕士の苦痛如何ばかりぞ。今頃の遠漕中他の生徒は家にありて吾等が校の爲遠征をなせるを知らざる者ありと思へば憤慨に絶えず。暫時する程に靑松白砂の近江舞子の濱見ゆ。而して湖岸に一短艇あり。之何れのものなりや、吾等の雄姿を見せばやと意氣揚々と漕付けたり。熟視すれば八幡商業第一選手なり。又一町を距つる處に同第二選手の艇あり。先づ上陸して林間の茶亭に食事を需め休憩せり。時に八商生來りて吾等に話す。曰く、「吾等八商選手は毎日八幡より此處に漕來りて漁夫の網引の手傳を爲し、一人に對してハス三匹を貰ひ歸るなり。ボートは學校の爲、ハスは吾等の爲、然らば吾等の爲になさざれば損なり。」と。是等の點に於ては井伊氏三十五萬石彦根金龜城下健男兒の爲すべき事に非ず、三時過となりて近江舞子を辭して堅田の

浮御堂に向ふ。此漕程甚だ長くして太陽少しも痺む間なく強く輝き、涼風なくて湖面にはさゝ波のみある天候なれば選手の苦しみ一方ならず。然れども常にトップサイドとリーダーサイドとの競爭を續け、或は汽船と競爭し、或は堅田附近の多くの漁船を拔き越へて進みぬ。炎威を逞うせし太陽は西山に沒し後數十分にして堅田の浮御堂を發見せり。此時吾人は大に喜べども、其顏を見れば疲勞のため一行餓鬼の如く、頰骨は現はれ見るも恐ろしき餓鬼の群に異らず。此有樣を父母の見まさば如何に感ずらむ。艦てボートの浮御堂に着きしは七時半、時に早、月は皎々として御堂を照し、水面にも其美き影を映せり。涼風堂畔の蘆原に吹いて、蕭々たる聲音を發し、鴨か雁か、東の空より志賀の古都をさして飛去るいと面白し。先づ浮御堂に上りて休憩し、堂上より大津市街及志賀の都墟等を望みたれど明にみとめ得ず。吾人等失望落膽して今宵は堅田にて止らんとしたれど旅館なし、故に八時十分、又愛艇比良に乘じて月下に漕出でぬ。吾人の陰は艇中に映り、オールの影は水上に射る。燃くが如き日中皮膚に出でたるしぼるが如き汗は夜氣と露との爲に身体氷の如く冷へ選手一同は惡寒を催せり。胸を惡くする者もありき。然れども勇氣を起して漕ぎ行きぬ。兎角する中に幽に三井寺の晩鐘風に傳はりて聞ゆ。鐘の音は聞ゆれど大津の電燈の光は望み得ず。疲勞に空腹は重りて漕げども左までに進行なく皆死に垂とするが如き体にてありき。吾人選手は此暑中休暇を彥中水上部の爲にかくの如く困苦缺乏の間に費し乍ら、他の諸會員が安眠せるを思へば立腹して止まず。然れども之は吾等選手が職責なりと思へば又然らず。疲勞重れども此夜中には志賀の都に至る豫定なれば、舵手は眼を開き、漕士は半眠にて漕行けり。間もなく大津市街の燈火點々として湖邊に現出し、三井寺の火又見るを得たりき。近くて遠き湖上の火、吾人等は大に疲勞を催したれども漕ぎに漕ぎ、彥中の勇敢なる水上部歌を合唱して疲勞を紛したり。蕭然たる月夜の湖上には唯吾等の勇敢なる歌とオールの音のみ湖面に響き、時に鴨の陣り鳴き渡るを聞くのみ。大津には段々近きぬ。夜も又次第に更け行く。艇中の吾等は早く大津に着き、先發して準備の任に當られた る池田先生及第一選手に會する事と早く宿に投じて休養する事とを望むのみ。何時か艇は大津の石場濱に入りたり。燈火點々湖面に映り、多くの汽船碇泊花電車の往來を見る。流石に滋賀の首都なりと思ふ程に石場の棧橋に着きぬ。時に吾人等疲勞のためボートより腰を立つるを得ず。互に手を執りて上陸せり。正に夜半十二時。大津の石場濱に着き居る他の學校の選手は彥中第二選手今着きたりと大いに注目せしが、蕭條たる大津の街を更に寂然たらしめぬ。吾等は泊るべき豫定の古川屋に到りたれど福岡商業既に在り。されば四宮の第一選手の宿る佃亭に泊りたり。此時池田先生及第一選手は吾等を大いに歡迎せり。宿の人は夜一時頃に夕食を献立てたり。然れども疲勞のため食事をなす事を得ず。食事する者も胸を惡くせり。舵手は池田先生に遠漕中に於ける困苦缺乏の間に吾人の大いに疲勞せるを語りたり、吾人は間もなく床に入り疲れを休ませぬ。三十日の朝になりて八時頃迄床に居たりき。第一選手は早石場濱に行き大學のボートにてコースを引きに行きたり。吾人等は大いに疲勞恢復する迄寢たりき。蚊帳中にて思へらく、困苦缺乏の間に遠漕をなし得たるは蓋し吾人の規律的動作にありたりと。食事後十一時頃石場の古川屋に至り午後は大學のアウトクラッチのボートにてコースを引きたり。此日より八月二日まで毎日二回、大學のボートにてコースを引きたり。又自艇にても引き、而してコースを引きたる後毎日二回体重を量りたるに三十、三十一の兩日は遠漕のため一回一貫匁を減じ、後一日二日の兩日は一回

一貫匁を增加したり。連日かくの如くして二日まで練習に費したり。三日になりて組すべき番附は發表せられたり。吾第一選手は第三回にして、其敵は常に四分臺にて到着し居れる山陰の米子中學にして、吾第二選手は劈頭第一回目にして敵は丸龜中學なり。此日は大いに休養して、選手一同明日の作戰計畫をなして床に入りたり。

時は來れり八月四日。吾等が遠漕に鍛へし腕は呻吟れり。宿より石場の濱を見れば已に熱心なる吾彥中應援團の生徒諸君は多數來れり。間もなくして吾等は、H、M、S、の漕服を着して武德會場に雄姿を現す。觀衆山の如く湖岸に立ち開始を待てり。號砲一發、開會の幕は破られて第二選手は短艇おほひ號に乘込み湖上に漕出でぬ。敵丸龜中學も出でゝ會場に禮をなし續いて吾等も美しく會場に注目禮を爲せる後、丸中と共に汽船に繫れ、勇敢なる樂の音と共に引かれ乍らスタートに向ひぬ。時に吾應援團は吾等が遠漕にて來れる二雙の短艇に分乘して盛に應援し、乘れざる者は陸にありて盛に應援せり。吾等の意氣又盛なり。滋々スタートに入りぬ。今は唯死を以て事に當るべしと吾等は合砲を待てり。若干もなくして砲聲一發、舵手はスタートヘビ一二十本をかけたれど敵は吾の先にあり。四百のポール、六百のポールに至るもなほ吾は敗をとれり。六百のポールに至りし時舵手はミツトルヘビー三十本をかけし時敵は吾と對々になり、次で八百のポールに入らんとする時に及んで、ラストヘビー三十本、ヤケ七本かゝりたり。此時に於て最期の大奮鬪をなせし爲、敵オールを亂し吾は先を越しぬ。されば勇氣益加はりて決勝線に於ては實に二艇身の差を以て勝を得たり。吾人の喜悅と滿足は如何ばかりぞ。こは吾人の困苦缺乏せし遠漕と、應援諸君の熱心なる應援の賜なり。勝ちたる我等は艇おほひ號を會場前につけ、上陸して幾千の來賓、幾萬の觀衆注視の中に會長田島法學博士より賞牌の月桂冠を得たれば、賞讃の拍手、樂音の殷賑、烟花の飛揚、旗幕の翩翻、四方に起る歡呼の聲の中に多人數に擁せられて宿に歸り、應援諸君に禮を述べ、直に第三回第一選手の應援に赴けり。然も遂に甲斐なく敗をとる。敵は米子中學とて常に四分臺に飛ばし居る勇者なり。第一選手は勝を敵に與へしも分數早かりき。爲に特選レースに推されたるも入らずして歸彥せり。第二選手も亦歸彥するあり。京都遊覽に赴くあり。吾は京津電車にて京都なる家兄の寓居に入り、居る事旬日、洛陽の新古名蹟を探りたり。

終に臨み出場選手監督者池田先生、及第一第二兩選手諸兄の健康を祈り、應援のため來津せられし武術部諸先生、卒業生及在校生諸君に感謝の意を表す。

出漕選手氏名を特筆すること左の如し。

第一選手　舵手川村九十九、整調田中常吉、五番小西彌代松、四番中村市太郎、三番若林太良平
二番土田精一郎、一番田中與惣彌

第二選手　舵手田畑久三郎、整調犬谷仲次郎、五山田昇、四門根秀次郎、三大久保明文、二橋本
孫一郎、一遠藤捨三

題大老井伊直弼侯銅像

特別會員　清堂　川島丈內

儼然猛雨獰風前。想見心腸鐵石堅。恨煞櫻田門外變。紛紛霏雪奈當年。

登佐和山

一墟山上欲凌空。百里東西指顧中。草棘徒環殘壘長。江山尙爲昔人雄。興亡如夢始終異。成敗在天今古同。休道黠兒護誤圖。回瀾有意見孤忠。

彦根城矚眺七言十韻

湖畔一笏金龜城。扳地千尺摩太淸。試從閣頂恣眺矚。湖山勝概双眸明。加越峰巒連亘走。蕭影萬頃晴波平。蒲席孕風頻往返。笙洲如夢描難成。比良膽吹相對峙。山巔雪色尤晶瑩。安土城遙認遺跡。佐和山險當面横。賤嶽姉川從指點。緬懷令人悲慨生。脚下淸曠佳麗處。一亭不負八景名。園池準擬瀟湘趣。堪憶藩公曩昔榮。一路向西多瑞氣。蜿蜒達處平安京。

服部擔風曰。湖山遠近勝概奔赴于一幅中。不遑目給意領。眞非畫手所及也。

無花果

(一)駄句集

四甲　梅原四十二

秋の風狂女の髪を亂しけり。

郊原一路、遠く細く枯芒の間に入る所、鬢髪蓬々、顏貌蒼癯たる狂女一人、默然と彷徨す。恨むが如く訴ふるが如き寒蛩の音を傳ふ秋の風、狂女の亂れし毛髪を嬲りては、徂徠す。

寒風颯々として、粉雪さへ交へ來る頃となりて、

木枯や障子切張る苦學生。

刑場に志士繫るや夕時雨。

思ひ出せしが如く又も、時雨は降り出でゝ、河原千鳥はチチと一聲淋しく啼きぬ。墨繪の如くにボーと浮び出でし、みやびの都には、靑灯三つ四つ涙ぐんで、夕月は顚へ震へて甍の波を離れき。白衣白袴の憂國の志士、若武者は靜々と刑座に著きぬ。

時雨は彌々降りに降りて、煙りて見ゆる夕月は再び戰く。

千丈の城壁破れて霰食む。

花時に感じて泪を濺ぎしは幾度ぞ。鳥別を恨んで心を驚かせしは幾度ぞ。あはれ、國破れて、さしもの堅城鐵壁も、今や、荒廢極りて、悲霰、戛々と破壁を打つのみ。

冬の月板橋渡る下駄の音。

昔戀しき京の宿哉。

冬の蠅吹けば散るなり古疊。

或る日曜の午後。さみしさの徒然に。冬深みゆけど、我が書齋の疊の破れも繕ひ得で、そのまゝなるぞかなし。

巽るゝや遲れて著きし終列車。
或る谿間の寒驛に列車待ち佗びて。
月弧なり大佛殿の垂氷かな。
魔の如き大佛殿に掛る、小き氷柱、寒月に照らされた、白金の劍の如し、大と小との面白きコントラストよ。
雪の原尿する人のかすみけり。
雪解や非人の群の村に入る。
雪の日の實景。
春風に觀光團の列長し。
暖き春風薫る都の光景。
歌の國繪の國戀し花の宵。
櫻花豔麗、春月朦朧たる春の一宵。空に知られぬ紅雪を、屐齒に蹈んで、花園を逍遙へば、我が心身頓に此の世のものならず、遠く、婀娜なる仙女の住むてふ、天國をさすらふ心地す。

(二) 新詩

小春日

老婆一人
　　繼物す。
　　陽、暖き緣先に
　　煤けし
　　やれ障子の穴を
　　ス——と拔けて、
　　赤蜻蛉。
　　屋裏に吸はれ行き。
　　あくびのび一つして
　　眼覺めし
　　小猫の眼に、
　　赤黑く映る
　　雁來紅の色。

長閑に
りんの音して、
豆腐賣は、
村に入り來れり。

紅椿

山寺近き墓地の側
燃ゆるが如き紅椿。
新にたてし墓の上に
ポタリと落つる紅椿。

　　あはきかなしみ
　　銀色につめたく光る、
　　ニツケルの緣！
　　うるみ勝ちなる、
　　曇れる凹鏡の面！
　　微に微に溫みを帶ぶ
　　ニツケルの緣よ。
　　ああ、ああ、
　　醒め行く、醒め行く。
　　冷きむくろに歸らんとして。
　　我は眼を閉ぢぬ。
　　尙、指頭に覺ゆ、微なる溫みよ。
　　おお、おお、
　　尙、冷きむくろに返らざるか。
　　冬の朝の一時。

春の野邊

赤、紫、青、こきまぜし花の褥に
すや〳〵と眠る乙女子一人。
神の如きそのかんばせよ。

暖き春の風。
白き、紅き、花瓣を齎し來りては、
何地へか行く。
乙女子の振分髪に、

呑舟魚

荒浪吼ゆる土佐の海
秋の夕風うら寒く
逆まく潮の白色し。
舟も通らず鳥飛ばず
沖合遙に連りて

綠の小波を殘して。

舞ひうかれたる胡蝶一つ。
黄色き兩翅に、
乙女の春の夢を乘せ來りて
何地へか飛び去りぬ。
心地よき春風の後を追ひて。

呑舟魚

第四學年甲組　久田郁三

高く潮噴く群鯨。
赤き夕日はきら〳〵と
舟呑む魚を照らすから。

犬養毅

高峰山は綠濃く
雲際高くそゝり立ち。

兒島の灣は波清く
千古の藍を湛へつゝ。
神氣充ち充つ備前の野

神氣の鐘なり充つ所
時に英雄出づといふ。
明治大正の憲政の
歴史を飾る英雄は
吉備津の國に生れけり。

國立憲となりしより
春秋此處に三十年
憂國の志士犬養の
胸に漲る抱負あり、
曰く排薩非長閥。

立憲政治の發達は
是ぞ終生の理想なる。
よし大臣も顯官も
幾百萬の黄金も

理想に比せばものとかは。

高き理想と大抱負。
石より堅き節操は
野黨の權威の名を博し。
憲政擁護の運動に
憲政の神と歌はれぬ。

議政の壇に獅子吼せる
慷慨深き犬養の
片言隻句これ輿論。
國民人の重望は
かゝつて存ず國民黨。

大正丁巳の政變に
國策樹立を奔走し。
國を憂ふる一念に
多年の主張を擲ちて
政府の樞機に參加しぬ。

苦衷を知らぬ世の人や
反對側の黨人は
變節漢よ。恥知らず。
民を欺く曲者と
口を極めて罵りぬ。

「變節漢と言はゞ言へ
我は忍ばぬ國の爲め
君國重く身は輕し」
偉大なるかな此の言。
崇高なるかな人格。

夫れ愛國の仁人は
毀譽褒貶を度外して
一時の恥を忍びつゝ
名を千歳の後迄も
末の世迄も遺すなり

武藏野にて

路傍の柿に風吹きて
小馬は高くいなゝきぬ。
馬士よ急げと聲かけて
手綱を引けばチャラ〳〵と
鈴に音して落葉散る。

今宵の宿の鴻の巣は
たそがれの野に薄がすみ。
青き上總の山に入る
赤き夕日のたゆたひは
豪家の土塀を照らしけり。

四甲　中村彌平

俯せば清き琵琶の湖。

大演習を拜觀して

一、仰げは高き膽吹山
山紫に水青き
繪の國の秋うるはしや。

二、淡海廣野のま玉露
彦根が城の錦雲
いともかしこし
すめらぎの
今日の行幸を待ち顏に。

三、折しも起る鬨の聲。
鴻鵬悠々天翔けて
叱咤の劍物凄し。
ああ、勇ましや湖國の野。

四、砲煙天に漲りて
篠つく彈雨地を穿ち、
軍馬驀(ヨロコ)び嘶きぬ。
ああ、雄々しさよ此の秋ぞ。

五、瑞雲長く引く所
尊き翠華耀々と。
小さき我は平伏して、
御代萬歳と壽ぎつ。

四乙　木下八郎右衞門

野薔薇

岸の柳は低くして、
野薔薇の幹は表はれて、
湧きてあふるゝ紅の、
色は水に流すらん。

天の鼓の樂の音、
高き低きに妙なへに、
野薔薇の色はいや增して、
エンゼル降ると思はしむ。

茜さす夕日眞に負ひて、
いさゝ流るゝ河邊にて、

野薔薇はこゝをさかりぞと、
たくましくめでたくにけり。
ひらけそめし昔より、

あゝ茲は

第三學年丙組　武村健吉

あゝ茲は
我等が績あらそひば
荒毛の虎は爪とぎて
試驗室にと入りにけり
おごましやとは

なましろき
首またくろき頭をば
むげなくたるゝこと〳〵と
筆こそ走れ音低に
白き紙の上

塗板の
文字より出でし難問は
これ暗愁の精なるか
おのも〳〵の眉動く
上に又下に

打ひそむ
強毛の眉の男は一人
息くるしげに吐息しぬ
耳にはなれぬ　靴音を
にくみし人や

暖き微風はさやさやと、
野薔薇の笑をゆらぎては、
赤き蜻蛉はむれに飛ぶ。

片すみに
一人はせきて　時間はと
呼びて問へば　試驗師は
眼鏡こすりて鋭き眼して
「二分なり」　あゝ

人息の
温氣こもりて　重々しう
しづむ空氣やふとあぐる
頭ひし〳〵おしつくる
あゝ　目まいしぬ

となり室の
ドア開くる音　ガラ〳〵と
廊下せましと高らかに

語り行きたる吾友の
とゝろは如何に
いと悲し
ラッパは鳴りぬ　聲高く
虎こそ唯め　室内の
しづまは破れあとばかり
どよめき立ちぬ

飛付きて
カーテンまくる　午さがり
枯野の末の榛一木
霜かれつくす梢をば
見入る幾人

（六、十二、二五、學期試驗後）

雜詠二十首

第三學年丙組　大久保明文

○海邊松

白浪に根を洗はるゝ磯馴松
幾代經るとも色は變らじ

○恩賜の御菓子

すめらぎのみめぐみあつくいたゞきし

赤と白との菊桐の花

○陸軍特別大演習

野に山にすめらいくさをみそなはす
　みゆきにあふみのはゆる民草

○行　在　所

そのむかし我家の持ちしその土地に
　五夜みかどのとまらせたまふ

○大演習拜觀

山川に野にはた空にみいくさの
　御威のひゞきとゞろき渡る

○提燈及旗行列

みつかれを慰めまつる幼兒の
　晝は日の旗夜は灯の海

○御座所拜觀

學び舍に宮居の跡を尋ぬれば
　木の香新に菊の花咲く

○賜餐場拜觀

官人はた武夫をめしまししし
　みむしろあとに杉葉とゞまる

○武德會出演

武夫が勳立てむと打出濱
　譽は高し志賀の浦波

○同上賞牌受領

創なくて月の桂を手折りしは
　伐りしにあらで神の御惠

○遠　山　雪

雪うけて初日に映る富士の根は
　けだかき國のすがたとぞ見る

○家大人ことし六拾六の春を迎へられたるを祝ひ侍りて

六拾あまり六とせの春を迎ふれど
　もも年まではなほぞはるけき

松原の濱の御園にすむたづは
　ながき齡を保つなりけむ

大殿のみ言かしこみ仕ふるは
　うもれ木の舍の老ゆる主かも

○一月十三日龍潭寺なる祖父君の墓碑に詣でて

立てませし君がいさをはいつまでも
　はな橘とともにかをらむ

○同月廿七日同寺の先妣の墓に香花を手向けて

いつくしみそだてませにし母君の
　御墓をがみて涙こぼるゝ

月毎におくつき訪ふも答ふるは
　むかしながらの松風の聲

○祖父君が自費をもて生前十七年間開催したりける故主直弼公誕辰記念會の經續され年毎に盛なるを喜びて

拾あまりと七とせすぎしその後も
　たえせぬきみのいさを語る日

○誤解さては曲解を受けて暗殺せられむとせし或る人の許へ送りける

とことはに國のおきてのあるかぎり
　いかでか君を害はめやは

むらくもはひとゝき君を覆ひしも
　赤き心のとはに照りけり

英文欄

The greatest Happiness is Labour.

Murata Rinjiro.

Walking is easier than running, standing is easier than walking, sitting is easier than standing, lying is easier than sitting, dying is easilr than lying, but I did not like the easilst and likel the hardest when I was ill recently.

校友より

比嶋マニラ市より

校友　北川儀平

拜啓

各位益々御多祥奉大賀候

扨て過日御惠送の校友會誌(十月發行)正に拜受仕候左樣御承引被下度候。

多年校の刷新に努められし小早川校長今夏突然御退職の由如何なる事情の含めるにや數年深厚なる薫陶の下に立ちし小生等實に鎖魂の情に堪ゑざるもの有之候。

母校今回の特別大演習に際し大本營たるの光榮に浴せられ候趣千歳の一遇と存候。

次號乃御惠送に預り其當時の盛觀に接し先は取敢へず御禮申上度如斯御座候。

余暇有之候はば又駄文にても御目にかけ可申候匆々。

明治神宮外苑より

校友會員　高橋貞太郎

拜啓

校友諸子益御健勝御勉學の段邦家の爲め誠に慶賀の至りに存候、過日は淩友會雜誌御惠送下され厚く御禮申上候、益々御發展の程祈上候。

此度の特別大演習に際しては、母校は大本營たるの光榮に浴し申候趣欣喜此の事に存候、在校諸子は更なり校友の末席に連る吾々迄肩身の廣さを覺ゆる心地致候、希くば、大いに心を練り、身を鍛へて、國家社會の爲に盡し聖旨の有難さに副し奉れん事を祈上候。

却説、小生儀本年九月より明治神宮造營局に勤務いたす事と相成り目下明治神宮外苑の設計に當り居候間此にその概要を申上げ諸君の御一覽に供したく存申候。

明治神宮御造營の事は已に國家の事業として着手いたし居り、着々工事を進めつゝあるは諸君已に御諒知の事と存候、之を内苑と申上げ代々木の御料地内に御敷地を御撰定相成りたる次第に候、御社殿の方は基礎工事を了り候間愈々本工事と相成候事と存申候、内苑には御社殿の外に寶物殿の御建設あるべく、之亦已に設計を了し工事着手の手順と相成候。

此の内苑に對して舊青山練兵場卽御大葬當時の葬場殿跡を外苑として經營いたすことと相成居候卽ち明治神宮御建設の議御決定と同時に、明治神宮奉賛會なるもの、時の東京市長たりし阪谷男等の發起によりて、組織せられ内地は勿論、新領土或ひは諸外國にある邦人にまで、その意を通じて寄附金を募集し、明治大帝の爲に永久に國民追慕の紀念物を造營する事と相成申候。

寄附金は已に豫定額を超して約六百七十萬圓と相成居る由に候。

奉賛會に於ては此の寄附金と同時に、外苑經營に致するある希望條件とを提出し、その經營を明治神宮造營局に委托する事と相成り、不肖その衝に當るの一員と相成りたる次第に候。

外苑が内苑の附屬物たる事は申すまでもなき事ながら然も明治大帝の御遺德を偲び奉るに於て、可なり大なる經營のなされたるものたる事は已に御承知の事と存申上候。

先ず外苑内に於る主要なる記念建造物としては

一、葬場殿建造物
二、聖德記念繪畫館
三、憲法記念館
四、大競技場

此の中(一)は葬場殿跡にある種の記念造營物を設くる事にて、そが如何なる形式のものになるかは未だ決定致しおらず候。

(二)は六百坪以上の大建築物にしてその工費約百二十萬圓に候との由に候、明治大帝の御事蹟を一々繪畫にて表し之を壁体にはりつめて、一般公衆に參觀せしむる事と相成居候、工事期間は先づ、六年—七年と考へ居候。

(三)憲法記念館は故伊藤公に賜りたる恩賜館を現狀のまゝ移築するものにて木造に有之、已に工事を初め居候。

(四)の大競技場は國民に運動を御奬勵遊ばされ

たる先帝の御志を体し奉れるものにして、鐵筋コンクリートの大スタンドを築造致す事と相成る可く候。

此の外大泉池、奏樂堂、銅像等の築造經營あるべくと存候。

目下小生の主として關係いたし居候は(二)の聖德記念繪畫館に有之候。

荷重くして力足らざるの概有之候へども最善の努力と誠實とを以て無事工を了らん事を祈居候。

工の進むに從ひまた〳〵御通知申上ぐるの機を得る事と信じ申候。

終りに臨み再び諸子の健康と修養とを念じ上候。

早々不一

大正六年十一月

瑞穗ヶ丘より

校友　仙波　健

○此の間澁谷君のところへお邪魔に上つて雜談に耽りましたが、其際此の雜誌の話が出ました。私は自分の心に誓つた如く、又諸君に御約束した如く、吾々の日々の生活の斷片を多少なりとも御通信申上げねばならなかつたのでした。私は私の怠慢を今更のやうに悔まねばなりませんでした。私は現在の無味な、乾燥せる生活の中から多少意義あるものを發見せんとするには可成の努力とタイムを要するのを知つて居ます。締切の期日に對して恐を抱きながら鐵面皮にも斯樣な無價値な拙劣なものをお目にかけやうとする私をお笑ひ下さい

○前の日曜に公園で大谷君に遇ひました。高工の方は來月の上旬に卒業せられる事になつてゐます布村君の御卒業も矢張同年です。本年度の卒業生諸君の中で誰方か御志望の方は有りませんか。惡くすると此次の彥中會に高工の方が無くなるといふやうな現象を呈するかも知れませんね。

○新卒業生諸君に、少し後れた觀があり、且つ經驗の乏しい私の申上げることですが、國漢文を入學試驗に課する學校を志望せらるゝの御參考にまで。

一、此の學課は今迄に相當の素養を積んで置かねば駄目の話ですが、徒然草、增鏡、平家物語、枕草紙などは一應は讀むべきものだと思ひます。私の考へでは徒に字句の解釋に拘泥なんかしないで文章全体の大意を汲み取るやうに心掛くべき事が肝要です。間に合はない諸君は問題集を勉强するのも一策です、惡くは無いでせう。

一、漢文は、今でも使つて居るでせうが服部さんの教科書をよく復習するのが最も有効でせう。私は文章軌範が好きで三年の頃から讀んだのでしたが之も相當有効でした。十八史略は讀みませんでしたが、日本外史は面白いので讀んで置きました。國漢文は入學試驗中最も輕視せられるやうですが其實仲々重大なものですから呉々も御注意申上げます。

○ステイヴンソンのニユウアラビアンナイトを讀んで見ましたが可成面白い本です。上級生諸君やもう學問をお止しになる方は暇にあかして御覽になるとよいと思ひます。

○高等學校一部や高商志望の方が往々在學中物理化學を怠ける癖が有りますが惡い事です。常識の上から見てあの位の程度の智識は是非必要です。私も嘗つては斯る愚なるものゝ一人でした、近頃大に其非を覺りましてチョイ〳〵暇な時に昔の教科書を引張り出してるんです。

○二部の方の事は詳しい事は長尾君や中村君から直接にお聞きになると大に得る所が有るでせう。實は此次からは此通信を長尾君にでもお願しやうかとも思つて居ます。觀察點を異にして居られるだけ夫だけより多く私の杜撰極まるものに比べて價値あるものを見出し得るでせう。

此頃の私はまるで獨乙語を習ふために生存して居るやうなものです。

○今日習つた中に、

自然が人類になる。然し人類になると共に最高のものゝ心に變化する。自然は神であり神は自然であるとゲーテは歌つた。而して此の神なるものは人間の血液の中に潛んで居る。ミケランジエロの畫に於て神はアダムに靈氣を吹き込んで居る。然るに十九世紀のニユウ、アダムは最初から身心共に神の靈氣に滿ちて居る、如何となれば彼は自然

其のものであるから。彼にはもう之以上何も加ふべきものはない。若し彼が輝く星を眺めるならば夫は同時に神の眼を眺め、自分自分の眼を眺める事になる。

キラ〳〵する露ー其の中には今、星が其の姿を寫して居るーの如くに彼は是等の星から天下つたのである。彼は是等の星に屬して居り、是等の星は彼の内部に存在する。總てが自然であり彼自身も亦此の自然の中に在る。總てが發達であり彼自身も亦此の發達の中に在る。

是が十九世紀の工業家の哲學上の大夢想である。彼等は手こそ煤に滿ちたれ、精神は光に滿ち〳〵て居たのであるー星の光に又世界の光に。

非常に面白く感じましたから轉載します。是はヘッケル論の中の一節なのです。

○昨日は珍らしくも雪が少しチラ〳〵しました。猛烈な伊吹颪が二三日來吹き荒れて居ます。寒が明けてこんなに寒くなるなんてーしかもこんな土地でー珍らしい事です。

今時計は十二時を少し過ぎて居ます、堪まらなく指が冷えますからもう之で失禮します、滅茶苦茶に急いだものですから、間違も多い事だらうと思ひます。別に原稿も認めず、ブッツケに書いたのですから夫の點については何卒御許し下さい。此次には長尾君と兩人がゝりで是非共もつと〳〵有意義なものをお目にかけるつもりです。

戸外では又一しきり荒れ狂つて居ます。

（七、二、一九）

大演習記事

大正六年陸軍特別大演習

前記

陸軍特別大演習たるや畏き邊りの年中御行事、將た我帝國陸軍の年中行事の一ならずや。大演習の目的や今更に愚筆を弄するまでもなし。

そも〳〵大正六年新春二月の末の方、此の御行事の行はせらるべき地の御内定ありたりと漏れ承るそも何れぞ。嗚呼それぞ今や吾人等が胸に千歳忘るゝ能はざる、吾人等が生國近江琵琶湖東の平野なりき。

而して吾が滋賀縣立彦根中學校は大本營行在所の榮譽を擔ふべき所と定りぬ。吾人等は當時、どうぞして此れの實として現るべきを一重に希望してありき。

時は去ぬるに吝ならず。待ちを乞ふ人に慈悲をもくれず、實に流れの如く矢の如く、吾人等に大なる望をいだかせつゝ、旬一旬と過ぎ行きぬ。

時に五月中旬、我政府は俄然、陸軍特別大演習事項を發表しぬ。即近江琵琶湖東の平野を中心として、參加師團を第三、四、九、十六の各師團とし、大本營行在所を彦根中學校とすと。

吾人等は遂に千歳一遇の一大名譽、且大責任を擔へるなり。あゝ何たる光榮ぞや。

　響者には、陛下未だ東宮におはせし時、畏くも御駕を當中學校に進めさせ給へるあり。今また遠からず御駕を迎へ奉るべしとは、何ぞ光榮の多かる。爾後小早川校長の訓示日に週に、都度生徒の心も層一層緊張し、終りまで責を全ふせしめられん事を天に將た地に祈りぬ。

時には縣衞生課よりの衞生講話あり、全校舍消毒あり、今や校内一日として大演習、大本營てふ念の腦中より離れたることなし、七月中旬、突として小早川校長の現職を辭せらるゝ事あり。大演習の期日迫りたる今日、其の職を辭せらるゝとは、

生涯の一大榮譽を捨てらるゝが如きも、而も先生の恩慮遠く深くして遂に挂冠せらるゝに至る、當時職員生徒の今日其の職を去らるゝ先生過去の手腕御德望を思ひて惜しみ悲まざるものなかりき。

いよ〳〵暑中休暇となるの前、校長職員、生徒歸省後の衞生狀態を深く憂へられ、重ね〳〵の注意ありて休暇とはなりぬ。

八月二十五日、大演習中當校學事休業となるべきを以て課業遲延せざる樣、當日より臨時授業開始せられぬ。時に生徒の缺席一人もなきの好成績を示す。此日第二學期始業式をかねて前校長小早川先生の告別式あり、同時に後任校長春日重泰氏の新任式ありたり。

いよ〳〵大演演習期日も近づきぬれば、演習氣分校內に滿ち新校長の下に日々を無事平穩の內に送りぬ。未だ炎熱やくが如くして惡病頻々として流行す。

爲めに縣衞生課、警察側よりの當校臨檢甚だ嚴を極む。

然れども吾中學は名譽ある大本營の榮を全うせんがため、各自一層の注意をなし、衞生狀態常よりも却て良好なり。

新學期始め宮內省より大谷書記官以下十數名來校しきりに大本營間どり、其他築造すべき建物の位置の選定あり。

いよ〳〵十月一日より諸工事始る。此日大工一百餘人校內に入れり。

大工の槌の音、鑿の音、所々取崩しの音、騷然として吾人等が受業の妨となることおびたゞし。然れども往時、巴里の普軍のために包圍せらるゝや砲聲殷々、喚聲騷然を極め、今や陷落に頻する折しも、尙巴里大學は平然として學業を進め、斷然閉鎖せざりしといふ。それ萬事にかくありたき事なり。

舜禹何人ぞ。人のなゝし事何ぞ吾人に爲し得ざる事あらん。況んや大工作業の如きをや。吾人等平然として業をうけぬ。精神一到何事かならざらん、大工の作業又格別の影響を及ぼさゞりき。

滋賀縣下、殊に演習に關係深き都邑にありては漸次期日もせまりぬれば、演習氣分とみに充ち渡り

就中彥根町は、聖上御駐驊の地なれば、道路家屋の修繕、綠門建設、電信隊宿泊等ありていや增しに人氣沸騰しぬ。

吾校內も諸工事着々として進み、期日接近と共に奉迎歌、奉送迎豫行演習等每日の如く行はれ、本校にありても朝禮の際、放課後等に之を行ふに成績極めて佳良なりき。

提灯行列豫行演習。十三、十四兩夜縣下學校職員生徒は提灯行列を行ひて御旅情を慰め奉らん筈なれば、十月二十九日午後二時半より豫行演習を行ひぬ。此日參加せしは、吾校を始めとし、彥根東西兩小學校、青波、青柳、千本、高宮、多賀、敏滿寺、久德等各小學校なりき。

順路は、先づ西小學校々庭に集合し、同校正門を出で、それより職人町、本町を經て京橋に出で、大本營前にいたり、招魂社前に於て隊列を整へ、上片原(堀端)を經て本町に歸り、五番町宗安寺前にて解散したり。隊列は四列とし、行列裁判所前に至りたる時一旦停止し、一團每に大本營門前に至り、陛下萬歲を三唱し、招魂社前にて停止。こゝにて更に隊列を整へ、上片原通過の際には特に注意して隊伍を切らざることゝなせり。この豫行演習は成績頗る佳良なりき。

愈々十一月とはなりぬ。吾人等天に祈り地に伏し惠ありてか、兎に角職員生徒の細心なる努力により今日まで何一つの故障なく、十一月一日を以て當局に校舍を引渡すことゝなりぬ。

五年級は現下社會の狀態に鑑みて、特に演習期日中は中止する他、西小學校一部をかりてこゝに中學校を臨時移轉し、授業を行ひぬ。而して四年級以下は一日より二十五日まで止むを得ず業を休めり。

宮內官來彥。六日內匠寮の一部大本營に入る。御料御馬車。馬匹三五頭並に宮內省馬車主任主馬寮係員五十名は七日午後一時三十分着貨物列車にて着彥直に大本營に搬入す。

十一月一日開け渡し以來。吾中學校正門には「滋賀縣立云々」の門表は外されて、「大本營」の三字嚴しく之に代りぬ。

昨の中學は今日大本營となりて、陛下御臨幸を待

つ。而して正門、裏門には警官、憲兵の嚴に警しむるあり、無用の者立ち入るべくも非ず。畏れ多くも神々しき極みなり。

「本記」

明くれば十三日、殆ど半年の月日を今か今かと待憧がれし日は來りぬ。此日幸に朝來快晴まことに心地よく瑠璃の如く澄める蒼旻には輝々たる太陽秋色の萬物に惠を與へ、金龜山上颯々たる松聲は今日の御幸をことほぐものゝ如し。餘等は午前中市中の狀況を見んものと宿より足をはこぶ。御通路に當る大道は坦々として鮮かなる幕目あり。家々は定紋つきたる幔幕をはりて皆恒觀を改めたり時に二三の鐵蹄秋氣を破りて聞ゆ。驚き見れば之騎馬巡査なり。馬上悠々たる姿又一種の感あり。其他腕車を走らす宮內官、自轉車を飛ばす新聞記者等肩々相摩すばかり。道を轉じて本町に至れば濠に架せられたる大橋の彼方、石疊の間に大綠門を見る。之彥根町の造りしものにして正面「奉送」の金文字先づ人目を射る。之より內へは出入を禁せり。

「鹵簿奉迎」（十一月十三日）

午後一時西小學校に集合、隊をなして出で彥根區裁判所前に堵列す。校庭を見れば數臺の馬車既に用意をとゝのへて停車場に向つて裏門を出でぬ。やがて二十分と書せる白旗をもちし警官自轉車に「て過ぎ程なく赤旗を手にせる騎馬巡査來れり。時恰も十分に迫りしなり。

鹵簿は近藤、谷口兩警部前驅を承り次に騎馬の近衞下士の捧ぐる金色燦たる天皇旗を先頭に、京橋にかゝり一同最敬禮の中に大本營に入り給ひぬ。龍車を仰ぎ奉れば大元帥陛下にはカーキー色の御軍服に大勳位の御略章を左肋に帶ばせ給ひ、龍顏殊の外うるはしく內山侍從武官長御陪乘、續いて劒璽を捧持せる日根野侍從、次で侍從武官、宮內大臣秘書官、澁谷主馬頭、宮內書記官、池松滋賀縣知事等扈從し、騎馬の二警部最後を承りぬ。やゝ少時にして後藤內相を始めとし、文武親勅任官、金モールに嚴しき各國陪觀將校等數十名陸續として腕車を飛ばして大本營に入りぬ。かくして吾人等は無事聖上を迎へ奉り。歡喜の笑を浮べて解散せり。

「第一回提灯行列の記」（同日夜）

午後五時、彥根中學校を始とし、彥根商工、東西兩小學校、其他附近村落の小學校男生徒凡そ五千天皇陛下の御旅情を慰め奉らんものと、かねがね練習を重ねし如く西小學校々庭に集り、四列縱隊を作りて紅提灯片手に「伊吹の峰に秋たかく……」と奉迎の唱歌をとなへつゝ、京橋を入り大本營前に到りて陛下の萬歲を三唱し、招魂社前の廣場に來り、茲にて列を正し行在所の東の濠に沿ひて進む。此の蜿蜒つくるところを知らざる火は、滿々と湛へたる水に照り映へて美觀いはん方なく赤誠こめて歌ひまつる奉迎歌はかしこくも天聽に達したるにや、大本營の東、千年の老松の影には御紋章つきたる御提灯の木の間を縫ひて行列の熱誠にこたへさせらるゝを拜しまつれり。

「南北兩軍前哨戰の日」（十一月十四日）

午前十一時、西小學校に集合、前日同樣區裁判所前の廣場に列す。「此日朝來秋雨降るかと思へば又止み、霽るかと思へば又曇り、四方の連山は白霧に蔽はれたりしかば皆々憂慮せしも、幸にして甚しき事なし、時の進むにつれて漸く靑空を見るに至れり。」

午後零時二十五分、御出門の喇叭は一齊に吹かれぬ。吾人の心底は雜念散じて一種云ふべからざるの莊嚴の氣にうたる。敬禮の號令耳を劈けば、軟風に翩々たる天皇旗すでに吾人の目前をすぎ、金輪燦たる御馬車の軋りも靜かに、只馬蹄の音のみ高く、車中には內山侍從武官長御陪乘、今日もまた御氣色うるはしく拜せられぬ。此時にあたり北軍飛行機は御出發を奉送せんために白雲ひくゝ空に飛翔して大本營の上空に旋回するを見る。

奉送迎終れば校長は本日夕刻を期して、伏見宮殿下、閑院宮殿下に御覽に供せんため再度の提灯行列をなさんと告げらる。

「第二回提灯行列の記」（同日夜）

六時又々西小學校に紅提灯をたづさへて集合、集るもの中學校以下東西小學、商工、北青柳各小學校生徒約二千名、音樂隊を先頭に七時京橋を渡り元氣旺盛奉迎歌を高唱しつゝ八景亭に入り、殿下萬歳を三唱せり。伏見大將宮殿下には浮見堂の椽側に出でさせられ、特に春日校長を御傍近く召させ給ひて御叮寧なる御言葉をたまはり、校長は面目を施して退出、一同亭を出でゝ外馬場なる大橋彌一郎方に御宿泊の閑院宮殿下のもとに向ひ、門前に並びて萬歳を三唱せしに、殿下には正面茶室に出でさせられて親しくみなはせ給ひ、尙中島御附武官を門前に遣はされ挨拶あり。

九時過解散したり。

「兩軍戰機熟するの日」（十一月十五日）

本日は休日なりき。朝來細雨催して曇天層雲に覆はれたり。然れども演習は繼續せられて砲聲殷々たり。飛行機も雨中を物ともせず、縱横無盡に走奔して其爆音恰も猛獅の咆哮するに似て終日追ひつ追はれつ奮鬪せり。

此日　天皇陛下には畏れ多くも秋雨を冒し給ひて午前十時五十分、大本營御發輦鹵簿前日の如く彥根停車場にならせられ直ちに統監列車に御移乘、同十一時五十分河瀨驛に御着、御馬車にて賀茂山なる御野立所に向はせ給ひ、肅々たる秋雨の中に熱心に三軍を御統監遊ばされたりとぞ承る。

最終戰陪觀の記（十一月十六日）

時はこれ、大正六年十一月十六日、今日は大演習觀戰の日ぞと午前三時枕を蹴つて起きぬ。窓を押せば銀月中天に小さく、群星獨り炳然として輝く。四時、外套眼深かに被ひて家を出で西小學校の門前に來れば早くも集り來るもの數十、皆々元氣鞅盛なり。四時半出發、芹橋を南に進めば月雲にかくれ、暗黑の泥道長く列りて先頭を便りに走ること一里半、其間或ひは道を失ひて田畔の溝に陷り或は友を見失ひて途方に暮れし事數回、漸くにして某村に達しぬ。泥田の中に入りて待つ程に誘導

將校來りて本日演習の大要を說明せらる、卽ち北軍は先日來北方に退却しつゝあり。而して今朝未明より當地に大會戰を催さんとす。南軍は急速なる追擊を以て北軍を衝かんとして今や此地に會せんとするものなり。

時正に黎明、東天白みそめて月西天に淡く、星影消えなんとして彼方の山、此方の森は靄深く立ちこめて、其中より響く銃聲一二發、哨兵のさぐり打にやあらむ曉の空にひゞきぬ。

時は刻々に移りて白き山の端は黃色となり、處々に潛み居る兵の姿漸くにして見え初む。銃聲やゝ烈しくなりて戰機愈々熟し、戰端は開かれたり。北軍は玆に於て强固なる抵抗を試みんものと、第三、第十師團の精銳を集めて遙か後方にある砲兵と相呼應して敵にあたる。南軍もさるもの大谷將軍麾下の第四師團及〇箇旅團の混成隊を以てこゝを先途と戰ふ。

余等中學校生等は誘導將校の指揮のもとに南軍の後方より進み、種々の說明をうけつゝ礮雷銃雨の中をひたすら北に走る、漸くにして朝暾山の端に出づる頃となれば戰はいよゝ闌となり、南北兩軍のうち出す巨砲の響は耳を聾し、彼處の森陰、此方の掛稻を楯に奮鬪する機關銃の音は恰も豆を炒るが如く、步兵のうつ銃聲と相和して殷々轟々天地を被ひて物凄し。時に二三百米突の低空に爆音勇ましく飛行機の翼をつらねて進み來るを見る。忽ち降す爆彈數十個、空中に破裂して銀光を放つ地上にては之を射擊する兵あり。兩軍の飛行機十餘臺、入交れて機關銃を浴せ合ひ、そゞろ歐洲戰爭を思はしむ。忽ち進軍の喇叭は勇しくも吹かれぬ。兩軍距離凡そ二百米突、中隊長の軍刀を揮ひて突貫を叫ぶ聲、同時に起る萬雷の如き喚聲、余等の如き懦夫をすら尙よく奮然たらしむ。數十の喇叭の音愈々すみ渡り、長刀をふるう少壯士官の叱咤の聲はます〳〵急に、泥濘膝を沒する水田を物ともせず武者振りつきて奮進する勇ましさ、眞に之れ軍國民の理想、壯者羨望の的ならずや。余等又等しく靴をとらるゝ泥濘を物ともせず、我先きにと軍に從ひて行く。然も余等の念中何等の苦なく、何等の疲勞なし。宜なるかな、邦軍の滿洲

の野に大軍をひかへて尙平然たりしこと、余等は今日始めて戰士の如何なる心理狀態にあるかを看破しぬ。

漸くにして突擊戰も、戰鬪中止の喇叭及氣球の上りしを合圖として止みぬ。此日　天皇陛下には五時御出門、犬上郡千本村大字大堀の龜甲山の御野立所にならせられ、今日の拂曉戰をみそなはせ給ひぬ。

閱兵式拜觀記　（十一月十七日）

—犬上川の大橋までのこと—

友の家に結びし假寢の夢枕ふと眼覺めしは午前四時なり、枕を蹴り衣を更へ制服の金ボタンもかくやかけずに玄關に飛び降りてゲートルそこそこ、差し出したる婆の手より辨當を引き取りて門を出でぬ、明くるにおそき秋の晨、ほの暗しと云はむより眞の暗と云はんか。御山の鐘樓にボーンと鳴るはまさしく四時、思ひ出したらん如く狹路を宙に集合地へと馳せつく。

息つく思ひの、集合地に至れば、こはいかに、既に一人の影だになし。茫然と佇む折から一小兒走り來りて、

「ぱけす」と怒號りて暗の中にかき消えぬ。

「不覺」とばかり叫びもあへす踵をかへして再ひ芹の堤へと指す、長川の夜の夢未だ狹霧の中にあり人家紅燈、寂莫として點々、我れ暗を縫ひて芹橋の袂に出づ、街道あかるくして、泥濘の路既に人影絕ゆ、嗚呼我れ遂に遲れしか。

何思ひけむ一丁餘り一目散に駈け出しぬ、泥濘譬へんに物もなし、到底疾走なりがたければ止むを得ず徐行す、流石に道の急がれ勝なるは、男なればにや、男なればにや。

見上ぐれば星斗爛々宛ら銀砂のこぼれたらんが如く、急ぎ行く我を襲ふ曉風前に凛々たり、後へに烈々たり。

一路暗く長くして我を導くと雖も、既に樂しむ物なし。

默々として進み行く吾れを驚かすものは、道にいこへる軍馬なり、ガサリと音を立てゝ出でくるものは、藁中に夢を結びし一兵卒なり、軍需品あまた積みなせる車の間を、ビショ〳〵とはね上げつゝ進む。

振り返る東天の巒峰夜色未だ沈々、前途、犬の長堤横つて、遠く我をはゞむ。嗚呼道尙ほ遠し。

見ずや、十里、暗黑中に明滅するかの燈の瘦せたるを。既にして我、路に友二三人を得たり。

村落の巷に犬、我を驚かすもの屢なり、犬に迄馬鹿よと叫ばるゝか、朝寢坊、面目もなう思ひぬ。

犬上川の橋の袂に至れば、遲れて友を彼等も追ふか、三三、五五、物をも云はで道をひた急ぐ者數多、生き返りたる心地せる我。

—橋より日夏の村迄—

彦根の町を去る事一里餘、堤の高きよりところ〳〵と、下り坂よりうち見し前方の村は見えねども、日夏なり、心漸くいさむを覺ゆ。

この頃、東天曙の空となる。小松の長く續ける街道、蜿蜒として動き行くは正しく人、日夏へと志す士なり、我心など廣く落ちつかざらめやは。我後に續く人なしと歎きしは先刻にして、暗中なればなり。今呼びかけて走り我等に合するもの、十又二十餘人。

日夏の村に入りてよりは頓に曉明るうなりまさりて、彼處此處に數十の高張の白くほのめきて消えなんとせるもあはれや。空星落ちつくして晨月寒う振へり。嗚呼人は戰く。

夜全く明け離れて、人家の燈消えはてぬ、鷄舍呼びかはす朝の明るみよ。

見渡す廣野、人霞の如し、嗚呼我れ如何せむ、本隊に合するそれはた能か否か？既にして一友人走り來りて告げて曰く我校彼處に在りと、衆蘇生の面持ちにて、走つて合するを得たり。遲れ者の悲しさ、コソコソと後ろにかくるゝもあはれなり。

—式　場—

河瀨驛、日夏間の田圃。

東十里の雲際、膽吹の高峯さやかに雪を浴びて立てり、旭と相映發するは實に今日の盛儀を祝して餘りあり、萬頃の田圃、秋色、紅黃を流すもの自然亦美裝して千歲の盛事をことほぐが如し。人をもて埋まれる廣き田野の中を一道坦々として走るこれ今日の行幸道路なり、暫にして人馬の往來止

み八時に至る、この時、○師團を先頭に幾旒の聯隊旗を擁して入場し來る、足並揃へて勇ましく、幾萬の御國の干城は歩々堂々として入り來るなり霞の奥より現はれて又霞へと入りて行く。鳴々多し御國の健兒。

喨々たる喇叭のひゞき、朝日に輝く銃劍のひらめき、カーキ色の軍服、馬上の青年士官さては肥滿の將官など、これ皆我等の血をそゝるもの、あゝ肉躍動し　眞に士氣の勃々たるを覺う。

各師團所定の位置に着く暫くは隊列を指揮叱咤する將校の聲耳に喧し。

―準備全くなるの時―

既に午前九時、準備全くなれり。

兵は大元帥陛下の御親閲を待ち衆は玉體を拜し奉らんとす、さしも廣漠たる田圃も今は咳だに聞えず。

仰げば天高く、軍馬肥えたり、喨々たる喇叭の音聞えぬ。聖上の御着御近きを報ずるなり。あゝ其時、龜山の上空に漂ひゐたりし輕氣球は突として赤球を掲げぬ、赤球よ。

「中止だッ」と誰かゝ口を切れば。

「しまつた」と云ふ聲も聞えぬ。

準備全くなるの時、幾千人の希望を斷ちし輕氣球よ、忽然として現はれし一朶の黑雲よ。

閲兵式は遂に中止せられぬ、固まりたる蟻の一時に散ずる如く、靜肅忽ち混亂となる、思へば人多かりき、望多かりき。されど閲兵式は徒に我等を失望せしめぬ、解散して各自歸路につく。

。大饗宴の催されし日　（十一月十七日）

午後一時より商工學校校庭に於て大饗宴の御儀あり。陛下群臣赤子を召して餐を賜はる。

本校にては校長及外七先生この榮を荷はれぬ。

「提灯行列の記　（十一月十七日）夜

此宵、寒天星まばらにして、金龜城白光中にふるう。午前七時西小學校の校庭に集合、前夜の如く樂隊を先頭に奉迎の歌を高唱しつゝ徐々に校門を繰り出づ。聲、勇壯星天を落すべし、沿道に見物する全町の人垣を左右に見て、京橋を渡り、町の奉迎門を仰ぎつゝ、大本營正門前に至る。森下敎諭の發聲にて、天皇陛下萬歳を三唱す。暗中に屹立する憲兵の佩劍の光りよ。秋氣愈々清くして一種壯嚴の氣我を襲ふ。再び行進をおこして、松の下に至り、隊を整へて、濠端を進む、紅き提灯の燈の濠の水に落ちて長蛇炎々と燃えて這ふもの美觀よく何の之れに如くものぞ。或ひは高く或ひは低く、振りかざす紅燈に赤子の赤心現はれて嬉し。

京橋のたもとにて小學校の兒童と分れ、寺に入る。此處にて校長より訓示あり。

「聖上、我彦中の赤誠を嘉し給ふや深し。銀盃並びに諸調度品を賜る。諸子豈に感戴せざるべけんやと。再び天皇陛下の萬歳を三唱して目出度く解散せり別れ行く男の子の口に

……伊吹の峯に秋高く
琵琶の湖氣もすみて……

時に午後九時、紅き健兒の名譽にかがやげる頰を見ずや。

「還幸奉送　（十一月十八日）

今日は陛下還幸の日なり。

午前五時と云ふに、我等は既に裁判所の前に堵列す、二十一發の皇禮砲天に轟くや、喨々たる君が代の吹奏は大本營の中庭に起る。

先驅を承る警部の馬の蹄の音戛々として起れば、續いて錦旗風に飜つて、御車の轍のきしり、いと靜かに御通御あらせられぬ。

午前六時十五分、號砲再び天にとどろくと共に、無事御氣色美しく御還幸、東の都に向はせ給ふ。

去る十三日、當彦根の地に入り給ひてより、今日十八日に至る一週日、三軍御統率の砌、或は寒風吹きすさびし荒野の果に馬を進め給ひ、或は險丘を蹈み給ひて、百萬の兵を鬱せらる、叡慮の程畏しと云はむも愚なり。

秋漸く晩れなんとして、西方の連山雪を戴かざるはなきに、或は隙もる風の玉体をおかせしことのあらざりしか、或は古松老杉の時に號風吹きあれて、軍旅の御夢をおどろかせまゐらせざりしか。否々あらず、聖上には殊の外御氣色美しく御還幸相成りしなり。

而も我が微忠を嘉し給ひて恩賜の品を殘させ給ふ我等何ぞ、それ多幸なる。

『御座所拜觀記（十一月十八日）

聖上御氣色いと美しく御還幸あらせらるゝや多幸にも我等彦中生は、直ちに御座所拜觀の許しを得たりき。

九重と匂ふ大内裡にはあらで假の宮居いと御質素なるも畏れ多しや。

まづ玄關より參入、緋毛氈の眞紅を蹈みて御座所に進む、博物教室を模樣替せられしもの。

正面は卽ち玉座にして、錦襴の布もて御机を掩び嚴といふも愚なりかし。

御椽端に立ちて御庭を拜すれば紅白の菊花、とりどりに咲き充ちて誇る。

少時にして御座所を出で玄關前に集まる。今更の如く菊花の御紋章のつける幕、高張をうち眺むるものあり、實にもと思ひぬ。

一同再び正門を出づ。

大饗宴場拜觀記（十一月十八日）

午前九時大饗宴場を拜觀す、彼の大アーチをくぐれば、菊花を型りて、つくられたる廣大なる饗宴場なり。

なだれの如くにして入れば、盛花にせる菊花のあやなるまづ眼をうばひぬ、正面は玉座、昨日の大饗宴の盛事彷彿として、目のあたりに拜するが如し。

一同拜觀し了りたるは十時。外に出づれば群集山の如く、入れよ〳〵と犇きどよめけり。解散。

後記

晩春五月、快報天の一角より飛來して彦根中學校上下六百の胸躍り、九月十日、縣吏入り、宮内官來り、工事の噪音校の内外に起りて氣愈々緊張し十一月十三日午後二時、かの陛下着御を報ずる最初の狼狽天に冲せし瞬間より吾等は張りつめたる滿月の弦が心もて一週の日を過しぬ。實に思出多き時日なるかな。

降りまた止む秋時雨今おさまりて金色の陽光雲間を洩れ、北軍の飛行機伊吹山の彼方より飛來して密雲の間より爆音のみ聞ゆる時、雨に洗はれて綠愈々濃かなる鈴鹿山脈のあたり、一朶の白烟浮びたりと見る間に聞ゆる砲聲、――二つ三つ四つ續いてボカリ〳〵と現れし白烟やがて搖、一連の白雲となりて北に流れ、砲聲又起る。嗚呼此時陛下着御の御時。

赤旗を打ちふりて急過せし警官の姿見えずなりてより幾分、忽ち橋板を蹈み鳴らす戛々蹄の音、前驅の警部に續いて錦旗燦として石垣の角に現れし時。

其夜生ひ茂る城山の古松老杉を搖るがして起りし萬歲の聲、奉迎の歌、火の海。

豆をいる銃聲と斷續する機關銃の轟き、而して轟々たる飛行機の爆音との中に二日を過せし其間の心、愈最後の決勝戰近付きし十六日の拂曉、泥田に佇立して開戰を待ちし時――闇に浮かべる金龜城、流星の如く弧線を畫きて飛ぶ光彈、夜は明はなれぬ――霧の中を退却する北軍、霧の中を追擊する南軍。――肉迫戰――距離幾百。

東天朝暾を浴びて悠然地上の活劇を見下す氣球、御野立所の木の間に見ゆる白き天幕――休戰の喇叭。

更にまた十八日の朝まだき、京橋上蹄の音永へに消へて車駕遠く東に去りませし時、涙をのんで消え殘る大綠門の電飾。

目にあり耳に殘る果して幾何ぞ。駐蹕六日、實に思出多き時日にてぞありける。

○駕一度東に去りぬ。張りつめし心の弦今切れぬ極度の緊張は今弛緩をもたらしぬ。人も己れもホッと息をつぎぬ。ホッと息をつぎて軈てグンニャリとなりぬ。茫然として過ぎ來し跡を顧みぬ。あゝ。

然らば吾等のなすべき事今止みしか。否々。

思へ萬乘の尊きを以て、時に山間僻陬、寒烟荒草の地に幸したまひ、時に一目茫々たる大平原に大轟を進めさせ給ひて、或は崎嶇たる峻坂を攀ぢさせられ、或は懸軍萬里、東西に馳驅したまひて六軍攻防演習の狀を欝はし將卒を鼓舞激勵し給ふ、

是れ既に叡慮のあるところ、況してや此間多くは地方小中學校の校舍を以て假居の室に當てさせ給ふ、寒風或は御座を洩るべし、大雨或は袞龍の御袖を濡すべし、然も嘗て意とし給はず旬日に亘りて御不自由を忍ばせ給ふ、叡慮のあるところ誰か感泣せざらんや。

之れ一は霜に寢ね氷に臥す將卒の勞苦を思召されてなるべし、一は勤儉尚武、躬自ら以て範を國民に示し給はんに依るべし、而して吾人の云はんと欲するは教育に對する大御心の深且大なるにあり。

全國幾百の中等學校中、嘗て吾校の如き光榮を受けたるもの今尚十指を屈するに足らずとかや。彥根中學校の名譽、此に於てか光一段の輝あるを覺ゆ。況んや本校、去ぬる年、陛下未だ儲副の位にあらせらるゝに際し一度駕をまげさせ給ふの歷史を有す。彥根中學校の名聲、此に於てか赫々として天下に揚る。譬へば百花爛熳、萬孕の花は開いて佳香馥郁たるに似たり。

さはれ花あるものは實あるを以て尚しとす。八重の花は咲き出でぬ。今之れが實を成すと否とは實に同學諸君の肩にありて存す。內外多事、今此絕好の機會を以て外幾千の校友が變らざる助力と、內六百の職員生徒が孜々學に努むると相俟つに於ては本校校運の上に一新紀元を劃する又必しも難事とせず。思ふに聖旨のあるところ又此れに近からんか。彥根はもとこれ山紫水明の地、水明の地古來英傑を生ずとかや、彥根中學校の前途洋々として多望なりといふべし。

陛下御出門に際して行在所、御椅子其他御調度品の數々を賜はれり。又墨痕淋漓として雲烟飛動の趣ある。「大本營」の標札をも殘し置かれぬ。誠に絕好の記念物といふべし。

大本營跡片付の爲め十九日より二十五日まで休校翌日より授業再び開始されぬ。此日御下賜の銀盃を拜觀す。之れ卽陛下御歸京前夜、特に春日校長を召され、本校職員生徒の勞苦に對して御滿足との御言葉と共に紀念として賜はりたるもの、徑三寸許り、菊花御紋章入りの崇高なるものなり。

尙御駐泊中、天覽に供したる本校生徒、(四甲野口謙藏、三甲森捨三他二名)以下縣下各學校生徒成績品は學術奬勵の御思召を以て御持歸りの御沙汰あり。後御菓子料若干を賜はりたれば、これを基として菊、桐御紋章型の押菓子を製せしめ生徒一同に配布せられぬ。生徒は思ひ思ひに之を一族に頒ちて皇恩の廣きを喜びぬ。

行在所は前の博物教室を模樣替に及ばれたるものなれば校舍多少の變動あり、現今陛下御出入の御砌御使用の廊下を以て會議室に宛つ。されど悉しきことは省く。

尙行在所は目下手入中にて永久に此好紀念物を保存せらるゝ筈。

雜記

數年前、確か北九州の特別大演習が濟んだ頃、早くも二三の新紙に次期の候補地として近江平野が擧げられて居るのを見た。とう〳〵お鉢が廻つて來たなと思つた。思へば夢の樣な事であつたが今や其の夢が現實となつて吾々の目の前に現れて來たのであつた。

歐洲戰爭に鑑みて今度の演習にはあらゆる科學的の智識を應用せる、あらゆる新武機が網羅せられるといふ事であつた。幾十臺の海軍飛行機が鴉の海の鷗の夢を驚かすだらうなどとも書いてあつた兎に角旨い事だと思つた。

實際大演習のことが發表されると待かまへた彥根町二萬の民草は雀躍した。然し乍ら吾彥根中學校六百の職員生徒の歡喜には到底及びも付かなかつた。噫吾等程幸福なものがあらうか。學校として之程名譽なことがあらうか。

九月、山蟬はもう衰へて今は法師蟬の世の中でなる。あの透通つた輕い衣の持主が、庭の青桐を我物顏に占領して居る間は殘暑の勢威は流石にきびしかつた。然し時は休みなしに過ぎて行く。冴え渡つた月が仲秋の空に蒼白い光を投げる頃になると、萩はこぼれ尾花はゆれた。あちらの草叢、こちらの垣根に秋の哀れを告げ知らす聲が起る樣になつた。然し乍ら小春日の午後、獨り郊外に杖を曳けば、いづこも同じ高天肥馬の秋の天地であつた。大氣は澄徹し、太陽は輝き、鳶は舞ふ。